

揖斐郡揖斐川町大貴山長国寺境内の石塔・石仏について

磯貝龍志、日置真穂、小野木学

はじめに

大貴山長国寺（以下、長国寺という。）は、揖斐郡揖斐川町日坂に所在する曹洞宗の寺院である。長国寺が所在する日坂は、西濃地域の山間部において古代・中世から社寺が設けられ、中世・近世は豪族が居住した地域である。長国寺本堂の裏や北側には複数の石塔・石仏が設置されており、これらは中世・近世における日坂の様子を知る上で貴重な文化財である。これらの石塔・石仏は、久瀬村誌等で取り上げられてきたが、いずれも写真や略図の提示等にとどまり詳細な検討は成されてこなかった¹⁾。そこで今回は、長国寺本堂北側にある石塔群の最高位に据えられた大型五輪塔を図化して検討するとともに、その他の石塔・石仏についても分析を深めることで、中世・近世の日坂周辺の社会的な状況の一端を把握したい。（磯貝）

1 長国寺と日坂の遺跡について

（１）日坂の位置

長国寺は、揖斐川町日坂に所在する²⁾（図１・表１）。日坂は揖斐川町市街地から北西約 10km の山間部にあたり、中央を揖斐川の支流である日坂川が東流する。長国寺は、揖斐川と日坂川の合流地点から 4.4km 西南西の、河岸段丘と小規模扇状地から成る砂礫台地、いわゆる日坂川台地上に立地する。また、周囲には日坂川の源流点のある貝月山と同様に花崗岩を岩体とする山々が広がる。（日置）

（２）長国寺の沿革

『久瀬村誌』には、以下のような伝承が記されている³⁾。壬申の乱を避けて長者平（揖斐川町）へ逃れた弘文天皇（39 代）の寵妃満姫が、当地に土着して田畑を拓くと砂金が出て栄えた。満姫は弘文天皇の子小倉皇子を産み、成長した皇子は糟川新五太夫貞成と称し、後世には糟川長者と呼ばれた。この糟川新五太夫貞成が、長国寺の前身となる長谷寺⁴⁾と小倉明神を建立した。小倉明神は揖斐川町春日美東に所在する津島神社で、長谷寺はその北北西約 220m の地点に跡地がある。その後、糟川長者は元慶 2（878）年から建久 4（1193）年まで続くが、熊坂太郎長範という不破郡青墓宿の大盗に襲わ



図１ 周辺遺跡等位置図

（令和２年国土地理院発行の２万５千分１電子地形図「横山」を使用したものである）

表１ 周辺遺跡等一覧

番号	遺跡名・地名	種別	時代
1	大貴山長国寺	社寺	中世・近世
2	春日神社	社寺	古代・中世・近世
3	中村遺跡	集落跡	縄文・中世・近世
4	県重要文化財「高橋家住宅付普請文書」	建造物	中世・近世
5	字 谷川	-	-
6	「廃寺跡」	社寺	不明

※番号は図１と一致する

れ滅亡し、大盗らが徒党を組んで長谷寺に籠居し荒廃したという。長谷寺が日坂へ移転した時期については二説ある。一つは応永元（1394）年で、壺村老人（『揖斐郡志』では高橋伊宮）という人が、霊夢によって日坂へ移し三堂を建築し、高照院に薬師如来、禅興庵に日光菩薩、如意庵に月光菩薩を安置して天台宗の寺院となったという説である。もう一つは、長国寺由緒書に記載があり、長谷寺荒廃後、寛永2（1635）年に日坂へ移転したという。また、慶長年間（1596～1615年）（『揖斐郡志』では應永12（1405）年）に今須明応寺の十五世転谿嶺綴を請じて開祖とし、薬師如来を本尊、日光・月光菩薩を側立として曹洞宗に転宗している。この時、寺号も長国寺になったと考えられている。日坂において壺村老人が建築した三堂の場所は明らかになっておらず、そこに祀ったとされる日光・月光菩薩の所在も現在不明である。長国寺の北東に所在する春日神社境内の薬師堂には、室町時代の作といわれる薬師如来坐像と、鎌倉時代末～室町時代初期にかけての作といわれる広天目・多聞天の側立が安置されている。本来、薬師如来菩薩の眷属は日光・月光菩薩であることや、長国寺本堂に安置されている薬師如来坐像よりも製作年代が古いことから、薬師堂安置の薬師如来座像が高照院に安置されていたものではないかとも考えられている。また、長国寺境内には、「敬白右為父母教養応永五（1398）年三月一四日教子敬白」と刻まれた花崗岩の鬼瓦屋根石⁵⁾がある。これらの仏像や鬼瓦屋根石の所属時期は14世紀頃であり、それ以前に遡る仏教遺物は現在までに日坂で確認されていない。（日置）

（3）日坂の中世の文化財

長国寺のほかにも日坂の中世について、近年の発掘調査成果や伝承から人々の活動のあったことが窺える。長国寺の南西に所在する中村遺跡は、令和2年度に岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行った。調査の結果、主に縄文時代前期～中期の集落としての土地利用が盛んではあるが、古代の堀・柵の検出と須恵器・灰釉陶器片の出土、中世の掘立柱建物2棟や、堀・柵等を確認した。掘立柱建物はともに2間×2間の小規模なもので、遺構が重複することから建て替えによるものであると考えられる。この掘立柱建物の所属時期は、周囲の遺構の所属時期から、14世紀前半（古瀬戸中Ⅱ期）と推定される。また、『久瀬村誌』に記載される伝承によると、正平年間（1347～1370）に土岐頼興の子である北方興国が当地に土着して土豪となり、天文年間（1532～1554）の末頃まで日坂の豪族として栄えたという。北方氏時代のことを知る史料等は現在までに確認されておらず、詳細は不明である。北方氏の没落後は高橋氏が後を継いだ。高橋氏は、家譜によると源頼朝が石橋山で挙兵した際、頼朝に付き従って軍功を挙げた人物で、美濃国に領地を与えられたという。その領地は、日坂方面からみて揖斐川を挟んだ対岸の山中に位置する小津であり、平安時代末期（1180年前後）に来住し、小津城主となったと考えられている。『久瀬村誌』によると、小津城について、明治5（1872）年に県が集めたという大野郡小津村の「明細村鑑帳」の中に高橋但馬守古城跡と記されており、「現地は小津集落最奥地の高地谷と杉谷の合流地点に南面して存在する要害地で、城戸内・内屋敷・外屋敷などの地名もあって、豪族の居館があつたらしい様相」があり（久瀬村1973）、高橋氏はその後姓を小川に変え、小川但馬守として3百数十年もの間、小津城に在城していたとされる。江戸時代を通じて大庄屋を務めた高橋氏が日坂に来住したのは中世末頃と考えられている。高橋家に伝わる家系図の最後の日付は天正10（1581）年6月2日であり、その二代前の高橋匡綱の肩書には小川但馬守致仕とある。小津城主が健在の時代に、小川但馬守の家来であつた高橋匡綱が、日坂住民の願望を聞き入れて在来したという伝承があるという。高橋家の屋敷は、大垣藩主戸田氏の視察の際には本陣となった。また、文久元（1681）



写真1 長国寺本堂北側石塔群



写真2 長国寺歴代住職墓地

年には、大庄屋とともに山横目役の兼務を申し付けられている。長国寺南 100m に位置する高橋家の屋敷は、近世山村の豪農屋敷の形態を残す格式高い民家であり、「高橋家住宅付普請文書」として県重要文化財に指定されている。

先述した春日神社には、室町時代作と考えられる古仮面 21 面を所蔵しており、越前出目家、近江井関家という室町時代末から江戸時代に能面製作の主流をなした面打ち二代作家の作品を含む。また、小津集落の上流の奥原では、鎌倉時代末から室町時代初期にかけて木地師が移住し、木地家業を続けていたと考えられている。彼らは小津村を本拠地としながら、木地材料の確保のために原木がある場所へ移動を繰り返した。日坂へ在来した木地師は小倉姓を名乗り、慶長年間（1601～1614）までに移住して 20 年間程滞在したのち、木地職を中止して日坂に定住したとみられ、高橋姓とともに日坂集落を構成していく。日坂は、美濃・近江・越前へ通じるルート上に位置すること、豊かな山林資源が存在することから、中世以降活発な土地利用がなされるようになる。（日置）

2 石塔・石仏の移動について

調査対象の石塔・石仏は、長国寺本堂の北側に、11 段の石段を設けて並べられている（写真1）。この石塔・石仏について、『久瀬村誌』では、「長国寺境内に移転安置された大きな五輪塔」、「特志家により一箇所に集められた」とあり、随所から持ち寄られたものである。また、日坂在住の方々にお話を伺う機会があり、この石塔・石仏についてお聞きしたところ、集落中にあったものを集めたもので、石塔を運ぶのを手伝ったことがあるという方もみえた。高橋 2005 によると、大型五輪塔について、「廃寺跡より五十メートルの谷川から見つかる。長国寺の東側、鐘楼と山際の間地点（元大銀杏有）前に移す。その後、昭和四十九年卯塔より宝篋印塔・五輪塔・石仏を移して無縁塔を建立し、大五輪塔もここへ移す。（谷川《字名》墓地多し）」とされる。また、「無縁塔の大五輪塔は、谷川より移された」とある。揖斐郡教育会 1992 によると、「谷川」の位置は、長国寺から南西約 250m 離れた日坂川左岸一帯であり長国寺とは地続きで、現在は畑地として利用されているようである。この谷川から 50m 離れた場所にある「廃寺跡」について、字登り尾の現個人住宅が建つ場所がかつて寺屋敷であったというが、これ以上の詳細は不明である。また、「卯塔」からも石塔を移動させたと記録があるが、周辺に「卯塔」という地名は見当たらない。卯塔は無縁塔と同義の用語であり、周辺で無縁塔のある場所として、長国寺本堂裏の山裾に設けられた歴代住職墓が並ぶ墓地がある（写真2）。石積上に無縁塔が並び、そ

の中に五輪塔や宝篋印塔の部材が散見されることから、「卵塔」は長国寺住職墓地を指す可能性がある。また、日坂北側の山際にあたる上村には、山腹から山麓にかけて墓地として利用された場所が複数あり、石塔群にはこれらの墓地から移動したものもあると思われる。(日置)

3 長国寺境内の石塔・石仏

(1) 長国寺境内の石塔・石仏の調査について

長国寺境内の石塔・石仏を検討するにあたり、令和3年11月23日に現地にて調査を実施した。大型五輪塔は、実測⁷⁾及び写真撮影、その他の石塔・石仏は代表的なものの写真撮影を行った。(磯貝)

(2) 大型五輪塔

ここでは、本堂北側にある石塔・石仏の最高位に据えられえた、大型五輪塔について報告する(図2・3、写真3、表2)。大型五輪塔の計測部位は図3のとおりで、各部位の法量は表2に示した⁸⁾。

大型五輪塔は花崗岩製である⁹⁾。4石から成り、高さは215.8 cmである。表面はあまり風化しておらず、残存状態は概ね良好である。表面は無文で、梵字や銘文の彫刻や墨書は見られない¹⁰⁾。地輪は下部が埋没しており、全体を確認できなかった。部分的に掘削して高さを確認したところ、地輪西側は43.5 cm、東側は46.0 cmを測り底面がやや傾くが、上面はほぼ水平で、水垂勾配は確認できなかった。地輪の上端幅と下端幅は同一で、側面は垂直に立ち上がる。地輪の最大高に対する最大幅の比率は1.98と扁平である。地輪の下に台座は確認できなかった。水輪は、その最大径がやや上位にあり、若干下窄まりとなる。火輪は南西隅の軒先端部と北西の隅棟が一部欠損する。軒裏はほぼ平らである。軒の中央はほぼ直線的で、両端に向かって緩やかに反り上がる。軒厚は中央で11.9 cm、端部で14.6 cmと薄い印象を受ける。隅棟や屋根中央部分は緩やかな弧状を成す。風輪の上端は平坦に近い。空輪は宝珠状だが、頂部がわずかに欠損する。なお、完存するため、組み上げの構造は不明である。

次に、この大型五輪塔と畿内定型五輪塔との比較を試みたい。従来、各地に点在する大型五輪塔のうち、西大寺叡尊塔に類似するものの多くが律宗系五輪塔として位置付けられてきた。一方、佐藤聖氏は、これまで律宗系五輪塔とされてきたものの多くは、13世紀後半に畿内で定型化し、14世紀に西日本を中心に律宗系以外の五輪塔にも影響を与えた、「畿内定型五輪塔」と特徴が一致することを指摘し、律宗系五輪塔の捉え方について問題提起した¹¹⁾。佐藤氏は畿内定型五輪塔の特徴として、「①空輪幅が大きい、②地輪・水輪・火輪の幅が比較的良好に揃う、③空・風輪の幅が揃う、④空輪が丸みを持った宝珠状を呈する、⑤火輪軒厚が比較的良好、⑥水輪がほぼ真円もしくは若干壺形を呈する」という6つを挙げている¹²⁾。以下では、大型五輪塔と畿内定型五輪塔の6つの特徴を比較する。

- ① 火輪の幅に対する空輪の比率は、畿内定型五輪塔の影響を受けて製作されたとされる西大寺叡尊塔の比率が0.52であるのに対し、大型五輪塔は0.49となり、近似値を示す。
- ② 大型五輪塔の水輪の幅は79.8 cm、火輪の幅は79.4 cmとほぼ揃うが、地輪は幅91.0 cmと広く、畿内定型五輪塔と特徴が一致する。
- ③ 大型五輪塔の空輪と風輪の幅はそれぞれ38.8 cm、38.0 cmとほぼ揃い、畿内定型五輪塔と特徴とが一致しない。
- ④ 大型五輪塔の空輪は丸みを持った宝珠状を呈し、畿内定型五輪塔と特徴が一致する。
- ⑤ 火輪の最大幅に対する軒の最大厚の比率は西大寺叡尊塔が4.75、大型五輪塔が5.38となり、大型五輪塔は軒厚が薄い。

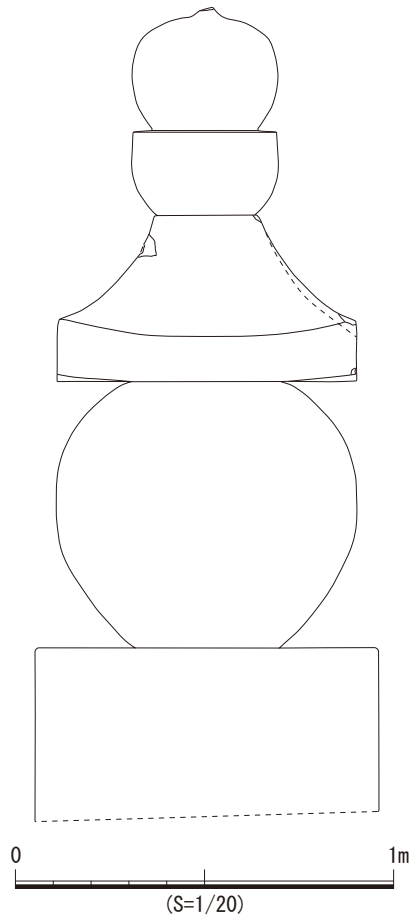


図2 大型五輪塔実測図

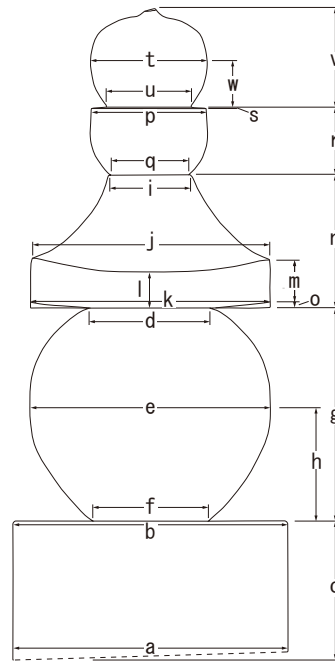


図3 大型五輪塔計測部位



写真3 大型五輪塔

表2 五輪塔各部位計測表

部位		計測値 (cm)
地輪	a	91.0
	b	91.0
	c	46.0
水輪	d	39.6
	e	79.8
	f	38.0
	g	70.6
	h	40.0
火輪	i	27.4
	j	(78.6)
	k	79.4
	l	11.9
	m	14.6
	n	44.0
	o	2.0
風輪	p	38.0
	q	25.6
	r	22.6
	s	0.5
空輪	t	38.8
	u	28.2
	v	(32.6)
	w	14.6
高さ(総高)		215.8

※ () は残存値

⑥ 大型五輪塔の水輪は丸みある若干の壺型を呈し、畿内定型五輪塔と特徴が一致する。

大型五輪塔と畿内定型五輪塔を比較したところ、②・⑤は特徴が異なるものの、①・③・④・⑥のように特徴が一致する点も認められた。そのため、大型五輪塔は、直接的か間接的かは判然としないものの、畿内定型五輪塔の影響を受けて製作されたものと想定される。畿内定型五輪塔と一致する特徴を多く持つことを踏まえ、大型五輪塔を畿内の年代観と比較すると、火輪の軒口が薄く、緩やかな真反りであることや、地輪が低いことから、14世紀前半以前の可能性がある¹³⁾。(磯貝)

(3) 境内の石塔・石仏

長国寺境内には、本堂裏の歴代住職墓と本堂北側の2箇所には石塔・石仏が遺存し、ここでは、それらのうち、中世から近世初頭に位置付けられるものの概要を記す。なお、当地域では花崗岩製一石五輪塔と石仏の型式学的検討が進んでおらず、中世末から近世初頭の型式差の識別が困難であることから、明らかな近世墓標を除く近世初頭までの石塔・石仏を対象とする。

本堂裏には近世以降の石塔が多く、中世末から近世初頭に位置付けられる石塔・石仏は組合せ五輪塔部材4点、宝篋印塔部材5点、石仏3点、合計12点であり、いずれも花崗岩製であった。一方、本堂北側にはわずかに近世以降の石塔が含まれるものの、大半は中世から近世初頭の石塔・石仏であり、一石五輪塔16点、組合せ五輪塔部材157点、宝篋印塔部材35点、石仏29点、合計237点で、花崗岩製の部材が多く、硬質砂岩製の部材がわずかに含まれる(表3)。なお、本堂北側には土砂等の堆積のために部材の一部のみを確認したものもあり、実際は表3で示した点数よりも多く遺存している可能性が高い。

組合せ五輪塔と宝篋印塔の各部材の最大点数(組合せ五輪塔は火輪の54点、宝篋印塔は基礎の14点)を概数とし、石塔別の概数を比較したところ、組合せ五輪塔が半数弱を占め、次いで石仏、一石五輪塔、宝篋印塔の順に多かった(表4)。岐阜市以西の西美濃全体では、およそ組合せ五輪塔が半数強を占め、次いで一石五輪塔、石仏、宝篋印塔の順に数が多いことが報告されており(竹田2020)、長国寺では一石五輪塔よりも石仏が多いことが特徴といえる。なお、背光五輪塔は確認できなかった。

次に、各石塔の概要について説明する。

一石五輪塔は、いずれも高さ40~50cm程度で、水輪の横断面形が隅丸方形を呈するものが多く、地輪の縦横比が1.25以上となる縦長のものは確認できなかった。一石五輪塔のうち、花崗岩製のものは火輪と風輪の境が不明瞭であり、風輪が扁平で空輪が肥大化するものが目立つ。一方、硬質砂岩製のものは火輪の上面に平坦な面を有しない形態で、空輪の肥大化が認められることから、近世初頭頃に位置付けられる(小野木2019)。

組合せ五輪塔は、2石と3石の部材は確認できず、いずれも4石から成る。その石材は大半が花崗岩製であり、前節で記した石塔群の最高位に据えられた大型五輪塔を除くと、小型の部材が目立つ。

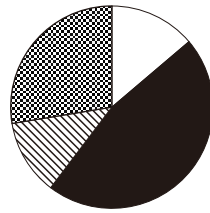
宝篋印塔は、いずれも花崗岩製である。基礎はすべて段形で、笠の大半は二弧輪郭巻きであるが、三弧輪郭巻きも確認できた。写真4の宝篋印塔は相輪が欠けているものの、現存高147cmである。基礎は輪郭内に格狭間を有し、塔身は四方に金剛界四仏の種子を配する。笠の軒幅は48cmで、隅飾が高く、かつ外傾し、隅飾間が狭い。相輪は伏鉢が低く、九輪は肉厚彫りで表現されている。この宝篋印塔の造立時期は、脚部からの立ち上がりの膨らみが弱い格狭間や、隅飾の肥大化などの特徴から、現時点では14世紀末から15世紀前半頃までを考慮しておきたい。

表3 部材別の点数

場所	石材	一石五輪塔	組合せ五輪塔					宝篋印塔					石仏				合計
			地輪	水輪	火輪	空風輪	小計	基礎	塔身	笠	相輪	小計	1類	2-A類	2-B類	小計	
本堂裏	花崗岩	0	1	2	1	0	4	5	0	0	0	5	1	2	0	3	12
	硬質砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
本堂北側	花崗岩	13	36	35	48	29	148	9	8	12	6	35	4	18	5	27	223
	硬質砂岩	3	0	1	5	3	9	0	0	0	0	0	0	2	0	2	14
小計	花崗岩	13	37	37	49	29	152	14	8	12	6	40	5	20	5	30	235
	硬質砂岩	3	0	1	5	3	9	0	0	0	0	0	0	2	0	2	14
合計		16	37	38	54	32	161	14	8	12	6	40	5	22	5	32	249

表4 石塔別の概数と比率

石塔名	数	割合
一石五輪塔	16	13.8%
組合せ五輪塔	54	46.6%
宝篋印塔	14	12.1%
石仏	32	27.5%
合計	116	100.0%



- 一石五輪塔
- 組合せ五輪塔
- ▨ 宝篋印塔
- ▩ 石仏



宝篋印塔（現存高 147 cm）



石仏 1類（高さ 65 cm）



石仏 1類（高さ 65 cm）

石仏 1類
（高さ 32 cm）石仏 2-A類
（高さ 24 cm）石仏 2-A類
（高さ 21 cm）一石五輪塔
（左：花崗岩製：高さ 49 cm）
（右：硬質砂岩製：高さ 42 cm）石仏 2-A類
（高さ 45 cm）石仏 2-A類
（高さ 48 cm）石仏 2-B類
（高さ 43 cm）石仏 2-B類
（板碑状の石仏）
（高さ 53 cm）

写真4 主な石塔

石仏は、石材を方形に彫り窪めないで仏体を彫出するもの（1類）と、石材を方形に一段彫り窪めて仏体を彫出するもの（2類）に分かれ、2類は仏体の左右に杵を有するもの（2-A類）と、仏体の左右に杵を有しないもの（2-B類）に分かれる。その数は2-A類が多く、1類と2-B類はいずれも5点のみを確認した（表3）。また、高さ20～30 cmのものと高さ40～70 cmのものがあり、後者の方が多い。石材は花崗岩製のものが多く、硬質砂岩製のものは高さ20～30 cmの小型品である。

石仏1点に表現される仏体の数は、1体と2体の場合がある。1類と2-B類は、いずれも1体のみの表現であるが、2-A類は1体の表現が16点、2体の表現が6点であった。また、2-A類の上部には切妻状の屋根を表現するものが多く、石龕と屋根は1石で彫出されている。なお、2-B類の中には仏体の上方に額と切り込みが認められる板碑状の石仏も1点確認した（写真4）。石仏の多くは室町時代から江戸時代初期までの造立と考えられるが、写真4の石仏1類（高さ65 cm）の左側のものは、阿弥陀如来坐像の形が整っており、南北朝期まで遡る可能性がある¹⁴⁾。

以上をまとめると、境内で確認できる石塔・石仏の時期や種類は、およそ以下のとおり整理できる。

- ① 14世紀前半以前 ：大型五輪塔
- ② 14世紀末頃～15世紀代 ：宝篋印塔、組合せ五輪塔、一部の石仏
- ③ 16世紀代～17世紀前半 ：宝篋印塔、組合せ五輪塔、石仏、一石五輪塔

初期には、総供養塔的な位置付けとして大型五輪塔のみが造立されており、その後、14世紀末頃から15世紀には組合せ式の五輪塔や宝篋印塔、一部の石仏などが、16世紀から17世紀前半にかけては、前段階に加えて小型の石仏や一石五輪塔が登場したと考えられ、後発するものほど形態の簡素化や数量の増加が進んだと考えられる。 （小野木）

おわりに

以上、長国寺境内の石塔・石仏について検討し、これらは14世紀前半から17世紀前半にかけて製作・設置されたものと整理した。

長国寺に隣接する中村遺跡で確認した掘立柱建物の存在から、14世紀前半には日坂で集落が展開していたことが窺える。大型五輪塔はその頃のもので、日坂周辺に暮らす人々の総供養塔として利用された可能性がある。また、日坂周辺においては14世紀中頃以降には北方氏が土着し、14世紀末には長国寺が移転したとされ、人々の活動が活発化したようである¹⁵⁾。石塔・石仏の多くが14世紀末から17世前半に位置づけられる点は、これまでの指摘を裏付けるものと言える。

第1章で示したように、日坂地区には石塔・石仏以外にも多くの文化財が確認されている。今後それらの文化財についても検討が進められることにより、日坂の歴史研究がさらに深化することに期待したい。今回の成果が、今後その一助となれば幸いである。 （磯貝）

謝辞

本稿を成すにあたり、以下の方々からご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

揖斐川町教育委員会、北澤志織、小谷和彦、狭川真一、高橋嘉明、長国寺総代の皆様

注

- 1) 揖斐郡久瀬村 1973、高橋 2005 で大型五輪塔について取り上げられている。
- 2) 本節の記述にあたり、揖斐川町 1971、揖斐郡教育会 1924、揖斐郡久瀬村 1973、春日村史編纂委員会 1983、岐阜県 1981、岐阜県企画部地域振興課 1995、岐阜県文化財保護センター2023、揖斐郡教育会 1992、久瀬村文化財保護審議委員会 1989、高橋 2005、有限会社平凡社地方資料センター1989 を参考とした。
- 3) 長国寺の沿革について、『春日村史』では「濃州揖斐郡春日村古今明細記」に記載された伝承を転記しており、違いが認められる。「濃州揖斐郡春日村古今明細記」によると長国寺は、行基が此地（春日美束）へ来て薬師・釈迦・大日・観音等の像を自ら彫刻した折に、一字の堂を建立したことに始まる。熊坂太郎張（長）範の籠城後、荒廃した長谷寺については、延元年間（1336～1339）に土岐頼康が再興したが、土岐氏没落とともに寺は荒れ、その一部が日坂へ移されたとしている。
- 4) 創建当時の長谷寺は揖斐郡揖斐川町春日美束字長者平に所在するとされ、長者平遺跡（県遺跡番号 21401-1524、縄文散布地）内に「長国寺跡」と記載された標柱が立てられている。寺跡は畑地の北端にあり、低い石垣を伴う2段の平坦面があり、池跡もあったという。平坦面の上段には近年建てられた堂が一字建ち、堂内に小型の組合せ五輪塔2点が安置されている。『春日村史』に掲載された写真には五輪塔が3点あり、天保年間（1830～43）にこの地を水田としたという。
- 5) 鬼瓦屋根石は、元々春日神社の拝殿下にあったが、昭和初期に長国寺内に移したとされる（高橋 2005）。現在は、藤橋歴史民俗資料館が所蔵している。
- 6) 岐阜県文化財保護センター2023『中村遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第160集
中村遺跡の調査成果については、岐阜県文化財保護センター調査報告書第160集として令和5年に刊行予定である。
- 7) 実測図の原因は1/5で作成した。
- 8) 計測部位は、基本的に狭川 2003 に則った。
- 9) 本石塔の石材の表面には、黒雲母と思われる黒色の含有物が認められる。また、在地で入手できる石材として花崗岩が選択された可能性もあるが、詳細は不明である。
- 10) 部分的に採拓も行ったが、彫刻の痕跡は確認できなかった。
- 11) 佐藤 2016 による。
- 12) 11) に同じ。
- 13) 大阪大谷大学狭川真一教授のご教示による。
- 14) 13) に同じ。
- 15) 揖斐郡久瀬村 1973、高橋 2005 による。

【引用・参考文献】

揖斐川町 1971『揖斐川町史』通史編

揖斐郡教育会 1924『揖斐郡志』

揖斐郡教育会 1992『岐阜県揖斐郡ふるさとの地名』

揖斐郡久瀬村 1973『久瀬村誌』

小野木学 2019「美濃の一石五輪塔」『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第5号、岐阜県文化財保護センター

春日村史編纂委員会 1983『春日村史』下巻、春日村

岐阜県 1981『岐阜県地質鉱産図概説』

岐阜県企画部地域振興課 1995『岐阜県土地分類基本調査「横山」』

岐阜県文化財保護センター2023『中村遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第160集

久瀬村文化財保護審議委員会 1989『久瀬村の文化財』、久瀬村教育委員会

狭川真一 2003「西大寺奥ノ院五輪塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告 2002』、財団法人元興寺文化財研究所本部

佐藤亜聖 2016「石塔の定形化と展開」『十四世紀の歴史学』、高志書院

高橋好勇 2005『ふるさと日坂』

竹田憲治 2020「東海 中世末・近世初頭の石塔の展開」『中世墓の終焉と石造物』、高志書院

有限会社平凡社地方資料センター1989『岐阜県の地名』日本歴史地名大系第21巻、株式会社平凡社